日本に自生するバラの野生種

野村　和子（バラ文化研究所副理事長）

バラは北半球にのみ自生し、その数はおよそ１５０種くらいにのぼる。

それらの内、１５もの種が日本に存在する。しかも数年前のバラの改良史でも述べたように現在のバラに発展する基本となった野生バラが２種も日本にあるのである。

多花性のノイバラはフロリバンダ系やミニアチュア系に発展し、つる状に伸びるテリハノイバラはランブラー系からつるバラへと改良の途を辿っている。その他にもハマナシは耐寒性を求めて改良がされている。

ノイバラ *Rosa multiflora* Thunberg

日本の野生種の中でももっとも普遍的な種である。沖縄を除いてほとんど日本全国に自生する。

multi（＝たくさんの）*flora*（花）と名づけられたようにたくさんの花を円錐花序につける。この性質に目を付けられて中国のロサ･キネンシスと交配されてポリアンサ（これもたくさんの花の意）が出来、ポリアンサと大輪の花が交配されてフロリバンダ系、小輪の種と交配されて現代バラのミニアチュア系となったのである。

花色は白、直径３センチくらいの花が２０個くらいの房咲きになる。鼻を近づけてもさほど感じないが、辺り一帯にほのかないい香りを漂わせる。５月中下旬開花。

小葉数は７枚、小葉の先端は尖る。明緑色。株はシュラブ状、つまり立ち

上がって枝先が垂れる半つる性であるが、北海道日高地方で林の中で光を求めて樹木に這い上がり、５メートルに達しているのを見たことがある。一説ではバラの棘は這い登るためにあるともいわれる。余談になるが、北海道では冬は地上部が枯れてしまい、つるバラは作りにくい。つるバラは前年に伸びた枝に花をつけるからである。そんな中で何年かかけて５メートルも伸びたということは、ノイバラはかなりの耐寒性があるといえるだろう。

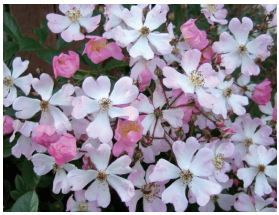
ノイバラを親にして改良した系統を、ハイブリッドムルティフローラ（HMult）といい、伸びるものが多く、耐寒性、耐病性に優れている。名の知れたところではファイルヒェンブラウ、ヴァイオレットなど。

またノイバラは日本では接木の台木にもされる。漢方ではノイバラの実を営実（えいじつ）と称して利用された。

花の数だけつく秋の実は美しい。

林や道端などいたるところでみられるが、千葉県の印旛沼畔でかなりの株がみられ、また奥多摩の御岳の川原でも自生をみたので、水辺の環境も好むのかもしれない。

ツクシイバラ　*Rosa multiflora adenochaeta* (Koidz.) Ohwi ex H.Ohba



学名でわかるように、ノイバラの変種とされているが、何か他のバラと自然交雑されたものでないかと考える人もいるくらい、ノイバラとは変異がある。

ノイバラより少し大きい淡桃色の花をたくさんつける。ノイバラと大きく違うところは、本種は花軸に赤みがあり、さらにその花軸から萼筒、萼片にかけてにやはり赤みのある腺毛が密集していることである。株全体はノイバラよりも大きい。九州熊本に自生が今もあり、そのためにツクシ（筑紫）イバラと名付けられている。少し遅咲きで開花は５月末になる。原種ではあるがフェンスなどに這わせると栽培種を超えるほどの美しさがある。

秋には小さいが赤い実がたくさんつく。

ヤマイバラ　*Rosa sanbicina* Koidz.

このバラも関東では自生がなく、本州中部以西でみられる。バラ属の中ではノイバラと同じグループ（シンスティラ節）に属するが、花は直径４センチくらいとノイバラより大きく、花色は白。枝はつる状に旺盛に伸びる。細長い葉も日本の野生種中では最大である。

全体が大振りではあるが、葉や花の風情はやさしげで美しい。

sanbucina　とはニワトコのような、という意味でかたまった花が遠くからみるとニワトコのようだったのだろうか。

テリハノイバラ　*Rosa luciae*　Roch. et Franch. ex Crep.

異名　*R. wichuraiana Crep.*

長い間*R. wichuraiana* の学名で親しまれてきたが、近年正しい学名は*R. luciae*である、とされているものである。

日本の南西部から本州のかなり北の方まで自生をみることができる。主に海岸や川原でみられるが、ときには明るい山の斜面などに生えていることもある。写真はいわき市の国道６号線沿いの高い法面に垂れ下がっていたものである。

花はノイバラとほとんど同じだが、心もち大きく、花弁の幅もいくらか広く、黄色いしべが多く目立つ。つる状といっても登ることはあまりなく、しなやかな茎が長く這って伸びる。名前の通り、葉には光沢があり、大豆粒大の小さい葉がきれいに並ぶ。

開花期は遅く、６月に入ってから開く。

本種を改良したつる性種をランブラーといい、これが発展して現在のつるバラの一翼を担う。現在はあまりランブラーとはいわず、ハイブリッドウイクライアナ（HWich）と称することの方が多い。親に似て遅咲き種が多く、６月初旬を彩る。キューランブラー、ドロシー・パーキンスなど。luciae も wichuraiana も人名に由来する。（この変種にはリュウキュウテリハノイバラ他もあるが、省略する）

ヤブイバラ　*Rosa onoei* Makino（別名　ニオイイバラ）

これもノイバラと同じグループ、シンスティラ節に分類されるが、その中でも最小の花である。直径は２センチほど。秋の実も小さいがたくさんつく。株も半つる状ではあるがコンパクトである。近畿以西に自生する。

ニオイイバラの別名があるが、それほど匂わない。onoeiとは植物学者小野職懿に因む。

モリイバラ　*Rosa onoei var. hakonensis* (Franch. et Sav.) H. Ohba

ノイバラに似た花を咲かせるが、大きな房にはならず、ひと枝に２～３花つくだけである。林の中に生え、いくらか暗くても生育できる。このことがモリイバラの命名の由縁であるのかもしれない。ジャスミノイデスの別名をもつが、それほどの匂いはない。

関東以西の太平洋側に自生する。

アズマイバラ　（別名:オオフジイバラ、ヤマテリハノイバラ）

R. onoei var. oligantha　(Franch et Sav.) H. Ohba

かつてはこのバラがロサ・ルキアエ（*luciae*)と呼ばれていたものである。（今はテリハノイバラが*R. luciae*）

アズマイバラの名のように関東を中心に愛知以東、宮城以南に分布する。ヤマテリハノイバラの別名のように葉には光沢がある。花は白色の小輪。アズマイバラ、モリイバラはヤブイバラの変種とされる。ヤブイバラは花が小さく、モリイバラは花房が２～４輪このアズマイバラは10花くらいの房咲きになるが、種小名のオリガンタは「少ない花」を意味する。

ミヤコイバラ *Rosa paniculigera* (Makino ex Koidz.) *Momiy.*

太平洋側は静岡以西、日本海側は新潟以西、四国、九州に分布するが、京都

付近に多いためにミヤコイバラと名付けられた。円錐花序にたくさんの花をつけることではノイバラによく似ているが、花が少し小さく、開花期がノイバラよりも少し遅れる。

フジイバラ　*Rosa fujisanensis* (Makino) Makino

本州、四国に分布するが、富士、箱根近辺に多く自生するため、自生地が学名になったものである。幹が樹木状にしっかりしており、枝は節ごとに屈曲することで区別がつく。

花はノイバラに比べやや小ぶりでやはり白の小輪、円錐花序につく花もノイバラより少なめである。

ハマナシ　*Rosa rugosa* Thunb.

本州太平洋側は千葉県以北、日本海側は島根県以北の海岸に分布する。花は濃桃紫色で直径は10cmにも及ぶという日本はおろか世界でももっとも大きい野生バラといえるのではないだろうか。花の鮮やかな色に加えて葉や茎にも独特の特徴をもつ。葉は光沢があり楕円形で、葉脈が深く刻まれている。それはしわがあるようにもみえ、学名のrugosa はしわがある、という意味である。茎には大小の棘が密集する。栽培すると人の背丈ほどになるが、風当たりのつよい海岸では低く枝を広げる。８月ころから扁平で大きな赤い実をつける。

自生地でもわかるように、耐寒性に優れ、また大きく美しい花と香りの良さのために改良もされている。ハマナシを親に改良したものをハイブリッドルゴサ(HRg)といい、そのまま香りを表現した名前、ローズ･ア･パルファム･ドゥ･ライなど多くある。

カラフトイバラ　*Rosa davurica* Pall. *alpestris* (Nakai)Kitam.

異名　*Rosa marretii* H.Lev.

名前の通り北海道に自生するもので、群馬県と長野県に隔離分布がみられるということである。花はハマナシよりふたまわりくらい小ぶりで色も薄く、ピンクといってもいいくらい。葉にしわもあるが、ハマナシほどではなく、形も長楕円形。枝はあまり横に張らず直立性である。実は球形になる。

タカネバラ　*Rosa nipponensis* Crep.

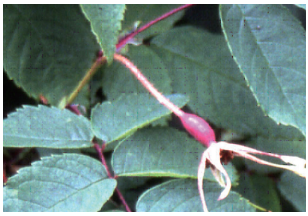
次に挙げるオオタカネバラが北半球の緯度の高いところに分布するのに対して、こちらは日本だけに自生する種である。

一見似てはいるが、細かいところでの差異がある。

	タカネバラ	オオタカネバラ
株	小ぶり	やや大きい
小葉数	７～９枚	５～７枚
小葉の形	円形	長円形
花径	３～４cm	４～５cm

富士山の５合目や尾瀬至仏山などで自生がみられる。

オオタカネバラ　*Rosa acicularis* Lindl.



北海道と本州中部以北に分布する。花はピンクの濃淡の変異がみられる。すこし高山に入らないとみられないが、秋田県の風穴では吹き出してくる冷気のため、風穴周辺で群落が見られる。

実は２cmほどの細長い形が特徴。

カカヤンバラ　*Rosa bracteata* J.C.Wendl.

（別名　ヤエヤマノイバラ）

石垣島など八重山列島の一部に分布する。和名は文政時代に八丈島の船がルソン島のカカヤンに流され、そこでこのバラの種子を持ち帰ったため、採集地の名をつけたといわれる。また、学名のbracteata はこのバラが萼筒の下に大きい包葉（bract）をもつことによる。

花径８cmくらいの大きな白い花で花芯の黄色が目立って美しい。小葉は楕円形で小ぶり、濃い緑色で光沢のある葉が美しい。枝は這うように伸びる。かなり遅咲きで６月にはいらないと咲かない。秋の実がまたユニークで実の外側が柔毛で覆われ、地色のオレンジがみえないほど、きれいといえないが面白い。この改良種に人気のあるマーメイドがあり、やはり遅咲き。

サンショウバラ　Rosa *hirtula*(Regel)Nakai

これもユニークな日本の野生種で、富士箱根地方にのみ自生する。名のとおりサンショウに似たたくさんの小葉をもち、バラ属中唯一高木になる。一日花で朝に咲いた花は夕にはしぼむ。（他は３～４日は咲く）実には長い棘が密生して大きく、その様子がクリに似ているということで、英名はチェスナッツローズという。赤熟しないうちに落果してしまう。これら特異な形状は多々あるが、魅力的な花で、淡いピンクの大輪花が日ごとに咲いては散っていく様には風情を感じる。

以上主だった15種をあげてみた。コハマナシ他、自然交雑種は省略。